

新時代への展望（一九七六—一九八九）

専修学校制度の誕生



専修学校制度成立前夜の「法案期成総決起大会」(昭和50年)

専修学校教育の中核担う

難産だった専修学校法案

創立者村田謙造の経歴を手繰ると、

- ・昭和二十四年 八月 日本各種学校総連合会常任顧問委託
 - ・昭和二十六年 三月 千代田区各種学校協会設立、初代会長
 - ・昭和二十九年 六月 東京都法人立各種学校協会設立、初代会長
 - ・昭和三十一年 三月 全国経理学校協会会長
 - ・昭和三十二年十一月 東京都私立各種学校協会相談役
 - ・昭和三十四年十一月 全国各種学校総連合会相談役
- 等々と各種学校団体に深く関わってきた足跡が記されている。

実は、戦後の各種学校にとって、その教育の振興ならびに地位の向上は焦眉の課題だった。高等学校や大学・短大と並んで学校教育の一翼、まして日本の経済を支える職業教育を担いながら、学校教育法上の位置付けは「学校に類する教育を行うもの」程度でしかなかった。

専修学校法案はこうした各種学校関係者の悲願が結晶したもので、昭和四十二年に国会に上程されている。しかし、審議未了で廃案。以後、五回にわたって上程されるが、審議未了廃案の連続だった。

専修学校法案成立へ向けて関係者の血の滲むような運動が続けられたが、その先頭にはいつも創立者村田謙造の姿があった。

昭和五十年七月三日、「学校教育法の一部を改正する法案」が衆議院を通過した。これこそが専修学校法案だった。運動を開始してから二十年あまり、国会に上程してからも十年の歳月が過ぎていた。専修学校制度成立を最も喜んだであろう人は、しかし、三か月あまり前に他界していた。

業 事 帯 附			程 課 門 專 理 經		
専攻科	速成科		簿記科	簿記科	簿記科
二か月	三か月		一年	二年	二年
一〇八〇	六〇〇		一二〇	五四〇	五四〇
夜間部	昼間部		夜間部	夜間部	夜間部
七二〇	一八〇		六〇	一二〇	一四二〇
昼間部	夜間部		昼間部	昼間部	昼間部
三六〇	四二〇		一六〇	三六〇	一四二〇
夜間部	夜間部		夜間部	夜間部	夜間部
七二〇	一八〇		六〇	一四二〇	一四二〇

村田簿記学校の専門課程認可

専修学校制度は従来の各種学校のうち、修業年限一年以上、年間授業時数八〇〇時間以上（夜間部は四五〇時間以上）、学生・生徒数四〇人以上など一定の要件を満たすものを新しく専修学校として位置づけ、その教育の振興を図ろうというものである。専修学校には中学卒を対象とする高等課程（高等専修学校）と高校卒を対象とする専門課程（専門学校）、および学歴を問わない一般課程の三つの課程が置かれる。

村田簿記学校は昭和五十一年九月一日、専修学校専門課程の認可を得て、新時代の専修学校として出発することになった。当時の学則を見ると上図のようになっている。

野に咲くレンゲ草のプライド

専修学校制度が施行され、従来の各種学校から専修学校に移行するところが相次いだ。五十一年には七〇〇校に満たなかったが、五十二年に二千校近くになり、生徒数も同年に三五万人を超えている。しかし、各種学校は公的な教育機関として最小限の法的規制の中で運営されてきたものだった。それだけに、高校や大学・短大など学校教育法第一条という学校と並んで法的に認知されることで、在野の教育機関としてのバイタリティや独自性が失われのではないかと危惧する向きもあった。

『週刊文春』創刊二十周年を記念し、昭和五十四年十月四日号で「流専門学校七代表大いに語る」と題した特集企画を組んでいるが、司会者の三浦朱門は席上「専修学校法ですが、これは、たしかに悪

い学校をなくすにはいいんですけれども、いい学校をだめにする恐れがないでしょうか」と水を向けている。

これに対して、村田照子は次のように語っている。

私は専修学校法の特色や問題点を文学的に言うならば、「やり野におけレンゲ草」であつたといわれないようにしたいということ、その反面、野に咲くレンゲ草のプライドは持つていきたい、この両方がなければ、これからの専修学校は伸びないと思うんです。

クラス制からコース制・学科制へ

村田簿記学校経理専門課程の簿記科は高校卒業程度の学力がある人を対象に、実社会ですぐに役立つ有能な経理担当者を養成することを目的としていた。二年課程は、簿記を初めて学ぶ人を対象にした普通クラス（昼間部・夜間部）と、ある程度簿記の知識がある人を対象とした商業クラス（昼間部）で構成、一年の十二月に能力・適性に合わせて税理士試験をめざす財務科や受験クラス、その他の普通クラスに分かれることになっていた。

専門学校になって高卒後の進学コースとして脚光を浴び始め、村田簿記学校には多様な目的の者が入学するようになった。教育内容も従来の簿記会計のほかにOA機器の操作や英語、販売士などが加わり、徐々に総合ビジネス学校のな色彩を帯びるようになる。そこで、教育の成果を上げるために昭和六十年代から簿記科にコース制を導入した。

二年制の簿記科に入学した学生はまず税理士受験コースか経理ビジネスコースに入り、十二月に適性・希望によって税理士受験クラス、経理スペシャリストクラス、経理経営クラス、経理秘書クラス、経理情報処理クラスに編成替えされる。

昭和六十二年度からはこのクラス制をさらに徹底して学科制が導入されている。すなわち、税理士科、経理秘書科、経理ビジネス科、経理情報処理科、そして前年に開設された国際ビジネス科を加えて、広範なビジネス教育を展開している。

高等課程の開設

高校の普通科化に抗して

専修学校法案が何度も流産の憂き目にあつたように、日本では伝統的に専門教育は軽視され、普通教育の下に位置するものとされてきた。この傾向は教育の現場ではたとえば大学進学指導一辺倒となり、高校以下の学校教育は、大学進学のための予備校化している。いきおい、高校の教育は普通科目重視となり、伝統ある職業高校が普通高校に衣替えるケースが相次いだ。

「しかし」と東京都専修学校協会の機関誌のインタビューに答え村田照子は語っている。

「（とくに私立の男子校では商業科が少なくなっているが）男の子に対して商業科を出させて勤めさせたい、という親御さんだっているはずだ」

こうした現状を見かねて、昭和五十八年四月、村田簿記学校は中



経理高等課程の校外授業、多摩テックにて(昭和63年2月)

学卒を対象とした三年制の経理高等課程を開設する。その時の挨拶文は「都立の商業高校が女子校化されている折から、男子の生徒で商業科を希望する人があつたらどうぞ……」となっていた。

経理高等課程の教育内容

経理高等課程のカリキュラムをみると、簿記・珠算関係の授業は一年次に約四〇〇時間。年間授業時数一、一九〇時間の三割強を占めている。二、三年次は簿記・珠算の時間が減った分だけ情報処理やタイプライター、ワープロ、総合実践、商業デザインなどのウェイトが高くなる。

これら専門教科は年間六六五時間当てられ、ほかに国語や数学、英語、体育、書道など一般教科に年間四二〇時間、ホームルームや読書、調理実習などの特別活動に一〇五時間が当てられている。

期待のうちにスタート

経理高等課程の開設が決まると、各方面から問い合わせが相次いだ。引きも切らぬ問い合わせにこたえて、第一期生は第三次募集まで行われ、八〇人の定員に対し、八五人が入学してきた。

順風満帆のすべり出しにみえたが、出港早々、暗礁が待ち構えていた。授業を開始してみると、高等課程では学習指導よりも生活指導が大変であることを痛感する。小学校、中学校の学習活動の中で疎外され、自発的学習意欲に乏しい者に対しては、まず席に座らせて授業を聞くところまでもつていくのが一苦勞だった。教室に、「一、あきらめないこと 二、あせらないこと 三、一步一步努力すること」という校訓を掲げ、毎日復唱させてきた。

根を張る高等課程の教育

高等課程の生徒たちは概して普通教科より専門教科に興味を示す。そして、専門教科を学ぶうちに隠れた才能が芽を吹くことが多々見られるようになった。ある生徒は全国経理学校協会の簿記・珠算大会で優勝した。しかも専門課程の学生の成績と比べても堂々二位に入るほどであった。

村田照子は高等課程の完成年度を迎えて、次のような感想を述べている。（『文部時報』昭和六十年七月号より）

本年四月、三年六二名、二年九八名、一年一四三名でスタートすることになった。脱落者が二年・三年にかなりある。はじめから本人の意志はなく、親の願いのみで入学させられた生徒があったことが、かなりの数となったともいえる。

義務教育を終了した段階で、胸を張って堂々と社会人となることも、一つの生き方であることを知っての上であるなら、私も心は痛まない。中学校の進路選択を指導されるにあたって、そうした配慮もしてほしいと思う。

三年生は四月に五泊六日の修学旅行を実施した。私も終始行動を共にしたけれど、列車内のマナーも旅館での行動も、客車係の車掌さんや、宿のご主人から、心からのおほめの言葉をいただいた姿をみて、この二年間に、よくもまあこんなに成長してくれたものと、頼もしい思いにふけった。

教育活性化の旗手として

高校教育の硬直化が叫ばれるなか、このような高等専修学校の実践に多くの期待が集まったが、残念ながら制度的な整備は後手に回っていた。

先の『文部時報』で、村田照子は続けて述べる。

この秋の進路選択にあたっては、是非思い通りに就職させ、専門学校への進学をかなえさせてやりたいと思う。それについても、昨年の年賀状に「（簿記の）一級に合格してみせる。そうしたら大学受験できますか」とたずねて来た生徒にむいてやれないことが残念でならない。

小・中学校までには、芽を出せなかった、歩みのおそい生徒が、ある機会に自分で努力しなければ道が開けないことを悟り、一生懸命頑張った。しかし、大学・短大への道は閉ざされ、専門学校でも高校卒ということが、その上の資格をとるための条件となっているところには入学できないのである。

後期中等教育の場として、十年前に折角、複線化された高等専修学校、それも三年制の学校に学ぶ生徒にとって、大空への窓だけは開けてやってほしいと切望する。

（中略）

大学がなにさ、短大がなにさ、とは言わない。しかし、今はただ、入学試験の難易度によってのみその学校がランクづけられ、それに合格したか不合格だったかで、生徒がランクづけられている。花にも早咲き遅咲きがあって、それぞれに賞でられ



経理高等課程での学校長の授業風景

ているのに。私もいつまでもこんなことにこだわらずに、高等専修学校を卒業したことに満足し、誇りをもって、世間を闊歩してくれる生徒を一人でも多く世に送り出そうと思っている。

文中にもあるように、それまでの高等課程は三年制の卒業生であっても大学入学資格が認められていず、進学しようとするば専門学校に限られていた。これは高等課程の生徒に大きなハンディであるばかりか、後期中等教育の多様化に逆行するものとして、関係者は大学入学資格の付与へ向けて熱心な運動を展開していた。

高等課程に学ぶ生徒に朗報が伝えられたのは六十年秋のことである。折しも、臨時教育審議会の答申を受け、高等課程のうち一定の要件を満たした学科の卒業生に大学入学資格が付与されるようになったのだった。

村田簿記学校の高等課程もこの大学入学資格の指定校となり、卒業生の進路は従来の就職、専門学校進学から大学・短大進学と大きく開かれることになる。

職場で専門技能を存分に発揮している者から、大学・短大へ進学し深く専門を極めている者、そして専門課程に進み、税理士試験に科目合格した者まで、高等課程卒業生の活躍には目を見張るものがある。

ある生徒の口癖は「断っておきますが、ボクは高校に落ちたから村田簿記に来たんじゃないんです。税理士になるのに近道だからです」というものだった。高等課程には今、口にくそ出さないが、同じようにしっかりと将来を見据えて入学する者が確実に増えつつある。

奨学金制度の創設

七十周年に二つの事業

努力する者に援助を惜しまぬ伝統

昭和五十四年、村田学園は七十周年の節目を迎えた。

「静かに振り返って見る時、私がこの学園の責任者となつてからはわずか四年ほどで、晴れやかで盛大な記念式を挙げるにはその資格がいかに乏しいことに気がつきました。どういう形で記念するのが最もふさわしいのかという考えを、私は次の二つのことをしよう」と決心したのです」

村田照子理事長は創立記念日に七十周年を迎えるにあつての心情を吐露し、記念事業として奨学金制度を創設し、永年勤続者を表彰することを発表した。

奨学金は授業料相当額を貸与するもので、村田簿記学校奨学生と村田女子商業高等学校奨学生がある。期間は一年（重ねて選定することを妨げない）、新入生は入学時に選定し、新入生以外については選考基準に基づいて選定する。

村田照子は「創立者は若い時いろいろと辛酸をなめたその体験から、自分の力の限りを尽くして学び、その努力を惜しまない学生には特に理解を示し、そして応援した。創立者を見習い、それを受け

継ぐことも私に課せられた仕事の一つ」と語っている。

永年勤続者四〇名を表彰

七十周年を記念して、永年勤続表彰を受けたのは二十九年勤続の籠宮昇をはじめとする四〇名の職員。受彰者を代表して籠宮昇が、「村田学園の一層の発展のために大いに励んでいく」と謝辞を述べた。

永年勤続表彰者氏名

村田簿記学校

籠宮 昇	高橋 文子	枅沢 裕	今井市太郎
小暮 富蔵	植野 作蔵	小柳 雄亮	辻 克二
籠宮章二郎	大竹 勇	佐々木健寿	坂本 正利
氏原 重信	小野里康輔	小林 悦也	山本 光男
竹内 将	松野 政雄	松野 芳江	藤井 禧和
橋本 一男	秦 憲治	中川 留子	橋本 義晃
久慈 伸樹	渋谷隆一郎		

村田女子商業高等学校

坂下 愛子	小澤 勇	肥田 美代	上野 藤吉
松井 正二	古莊 元康	金子 静枝	小田 正生
杉本 昭一	横沢 智	林 輝康	林 ヨシ子
西川 茂次	竹田 盛康		



創立70周年当時の村田簿記学校教職員



創立70周年当時の村田女子商業高等学校教職員

学園に新時代の槌音



市川に新校舎が完成

村田学園に課外活動の殿堂

創立者・村田謙造が剣の道を志し、また書でも一家をなしていたことはつとに有名だった。これらの諸芸が人間に深みをもたらすことを熟知していた村田謙造は生徒にも「よく学び、よく遊べ」と強調した。このため村田学園では伝統的に課外活動が活発だった。

しかし、とくに簿記学校は都心の一等地にあることから施設が手狭で、伸び伸びと課外活動に打ち込むには支障があった。こうした不便を解消し、種々の課外活動の場を保証するとともに、団体行動を通して社会性を身につけてもらうことなどを目的に市川校舎（千葉県）が設けられ、昭和五十九年十二月十五日に落成式が行われた。

夢のふくらむプラン

村田照子はこの市川校舎を建設するにあたってどんな思いを託したのか。女子商業高校の新聞『ひさかた』（No.五〇）に次のように述べている。

生徒数も増加し、また皆さんの体格も当時（昭和三十六年）からみるとすばらしくのびのびと成長して、この校舎だけでは

その若さあふれるエネルギーをささえきれない思いがしてきたのです。数年前から手をつくして探しているうちに、ようやく市川の土地を購入することができました。

私は思い切り夢のふくらむようなプランをねりました。

テニスコート三面。ソフトボールもできて、一五〇メートルのトラックもつくれる運動場。中庭には野外ステージもつくて、皆さんが種々の催しに利用できるようにしました。

建物の中味は、大体育館と小体育館。バレーボール・バスケットボール・バドミントン・剣道や卓球の練習も同時にできるスペースがあります。

多目的ホールは学年の集会や発表会に利用できますし、一八〇名収容の視聴覚の階段教室。調理室、茶室もそなえた和室。普通教室。二クラスは一度に利用できるシャワー付きの更衣室。玄関を入ったホールは床暖房をして皆さんの憩いの場になっています。

本校の隣接地というわけにいかなかったので、少しでも皆さんが、市川校舎に行くことを楽しんでもらうように考案したつもりです。週の一日は、学年毎に市川校舎で授業を受けるようなプランを、目下先生方に考えていただいています。

随所に細やかな心配り

市川校舎について「ひさかた」(No.五〇)では「校内に模型が展示されており、そのすばらしさはある程度予想されていた。とはいえ、完成した新校舎を目の当たりにした驚きは大変なものであった」として、詳細を報じている。

外壁及びメインエントランス(玄関)・中庭は、総て赤レンガで化粧され、中には体育館二・多目的ホール・調理室・視聴覚教室・普通教室六・和室三・学習モジュール、それに床暖房の施された談話コーナーなどが設置されている。また、外にはグラウンド・テニスコート三面、さらに中庭には屋外ステージなども作られ(中略)……。

地上四階建の新校舎は、生徒利用のみでなく、地域の方々のスポーツ振興にも寄与すべく、一般の方々の玄関や、自転車置場なども用意され、また身体障害者の方々の利用にも便を図って、車イス用のスロープ・トイレ・エレベーターなどのきめのこまかい設計も施されている。

この市川校舎は卒業式などの学園行事に広く使われているほか、教員の研修にも活用されるなどフル稼働している。

本格化する簿記学校のクラブ活動

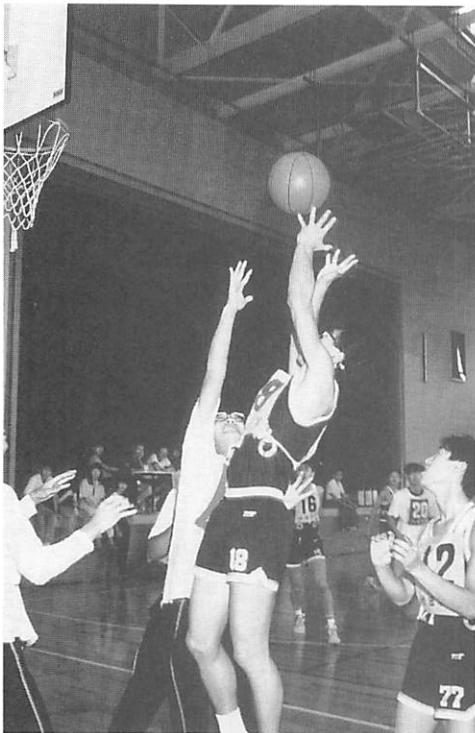
村田学園における課外活動のプログラムは市川校舎の建設を機に飛躍的に充実する。

現在、村田学園で行われている課外活動としては、校外授業やスキー教室、高等課程と女子商業で行われている北軽井沢の合宿、そしてクラブ活動などがあげられる。これらの活動は、専門技能を極めるだけにとどまらず、人間的な豊かさや積極性を養うために積極的に奨励してきた。

専門課程のクラブ活動については、本格的に活動が行われた



市川校舎でのクラブ活動



市川校舎での体育祭

のは昭和六十一年の秋のこと。もともと同好会等で行われていた剣道部・バレーボール部を中心に、平成元年度には体育系・文化系を合わせて四一団体が活動している。

また、高等課程でもソフトボール部やバレーボール部、バスケットボール部などは関東地区大会で頭角を現し、例年優勝候補の筆頭にあげられている。

村田学園ではその後、市川校舎の隣接地に新たに敷地を取得し、サッカー場として利用している。都心から一時間足らずの距離にこのような施設が設けられ、課外活動の制約が皆無になっただけに、市川校舎が村田生の学園生活をどれだけ豊かに実らせるか関係者の期待は大きい。



皇居において海部俊樹文部大臣より褒章を受ける村田照子(昭和61年5月)

村田照子校長に藍綬褒章

親子二代の藍綬褒章

昭和六十一年春の褒賞者の中に村田照子の名があった。長年教育に貢献してきた労により藍綬褒章を授与されたもの。同年還暦を迎えた村田照子校長は女子商業高等学校、村田簿記学校の経営・指導にあたるかたわら、全国商業高等学校協会副理事長、全国専修学校各種学校総連合会、東京都専修学校各種学校協会の常務理事を務めるなど種々の要職にあった。

思えば先代の村田謙造校長が藍綬褒章を受章したのが昭和二十五年。親子二代の晴れの受章であった。

「よくぞここまで…の感慨でいっぱい」

村田照子は村田簿記学校経理専門課程の新聞『かわら版』に、次のような藍綬褒章受章の喜びを寄せている。

父が藍綬褒章を受章したとき、非常に喜んでいたので思い出します。あれから三十六年たったのですね。私が学校の手伝いを始めたのが昭和二十六年で、よくここまでやってきたな、という感慨でいっぱいです。いろいろ苦労はありますが、教え子から手紙をもらったときには教師冥利に尽きます。

褒章に恥じないよう、これからますます健康に注意して教育に邁進してまいりたいと思います。



市川校舎にて褒章受章の祝賀パーティー(昭和61年6月)

市川校舎で祝賀パーティー

村田照子の藍綬褒章受章祝賀パーティーは職員の発議により、六月十四日に市川校舎で行われた。

参加者が見守る中、村田簿記学校の藤井教頭、女子商業高等学校の五頭教頭のエスコートによって登壇した村田照子に保護者および教職員・学生から祝辞が述べられた。つづいて花束贈呈が行われ、会場には割れんばかりの拍手が響きわたった。

パーティーに移り、参加者が自慢のノドを披露、校長も自らマイクを手にするなどムードは最高潮に達した。



教育の新しい流れ

時代の要請に心えつつ

国際化への対応

戦前、海外にソロバンを紹介したり、戦後も早くから諸外国を視察、他校に先駆けて英語をカリキュラムに採り入れてきた村田謙造だけに、忍び寄る国際化の波を察知し、対応しようとしていたに違いない。また、事務部門へ情報機器が普及しはじめる以前に今日の事態を洞察、一号館建設の際、コンピュータ室の開設を予定していた。

創立者の遺志を継いだ村田照子は、これらの課題を次々と実現に移していく。

国際化社会におけるビジネス教育のあり方を肌で感じてもらうため、昭和五十二年から教員のアメリカ研修を実施し、毎年四名の教員をアメリカに派遣してきた。さらに、同五十八年からは学生のアメリカ研修旅行を実施、これらの成果は六十一年の国際ビジネス科開設となって結実する。

定着する専門課程のアメリカ研修

専門課程のアメリカ研修旅行は夏休みを利用して約二週間の日程

で行われている。

第一回以来、二〇名から六〇名の学生が参加しており、研修にはワシントン大学における簿記・英語の学習をはじめ、カナダ、ロサンゼルス、ハワイなどの観光も含まれている。

国際的センスを養い、視野を広げるまたとない機会として、学生に好評を博している。

情報処理教育にも先鞭

さらに、コンピュータの経理への応用や情報処理教育についても先鞭をつける。すでに、昭和五十五年には、オフィスコンピュータ(Melcom 80-28)とワープロを導入し、オフコンを使った会計教育を開始。事務関係では当初、学生の成績管理用に使っていたが、その後、進路関係や教務関係にも使用するなど事務処理面でもコンピュータがフル稼働するようになる。さらに昭和五十八年にPC8001を二〇台導入、六十年にはMelcom 80-28を導入したほかPC8001を四〇台増設し、学内の業務のほとんどがコンピュータ化される。

こうして、長年にわたって培ってきたノウハウを結集して、昭和六十一年には簿記のCAI (Computer Assisted Instruction) を完成、発表する。

MCAIと呼ばれるこのソフトは現在、入門編、三級編の二コース



授業風景（現在）

が発売されている。パソコンがあれば、いつでもどこでも学習できることから照会がひっきりなし。企業や個人、学校などで利用され好評を博している。

このMCAIの完成により、全国どこでもあまねく、村田簿記学校の優れた簿記教育が受けられるようになった。創立者の願いであった簿記の普及に画期的な役割を果たすに違いない。

成果あげる会計士科

税理士と並び、経理を学ぶ者にとって最大の目標とされる公認会計士の資格。村田簿記学校ではこれまでも専攻科を設けて公認会計士の受験指導をしてきたが、その伝統と実績をもとに昭和五十六年度から会計士科を開設した。

会計士科には十六か月の本科と、単科が設けられ、公認会計士二次試験合格者は少数ながら、年々優秀な人材を輩出している。

なお、高卒者の場合、税理士試験は日商一級か全経上級合格者であれば受験資格が与えられるが、公認会計士は第一次試験（国語・数学・論文）から受験しなければならない。村田簿記学校では公認会計士一次試験の指導もしている。

附帯教育の広がり

村田簿記学校ではいわゆる本科のほかに附帯教育を設けて、多様な教育機会を提供してきた。この中には、税理士、公認会計士などの職業会計人をめざす人から、転職あるいは再就職、あるいは就職に備える新卒者などさまざまな人たちがいた。

二十一世紀の足音とともに日本は世界に例のないスピードで高齢

化社会に突入している。青少年だけでなく、中高年者が配置転換や再就職のために職業教育を求める機会は増大する一方である。また、変化の激しい社会にあって、生涯にわたる継続教育の必要性が急速に高まっている。

附帯教育および別科はこうしたニーズに柔軟に対応できる。村田簿記学校ではこの特長を最大限に生かし、簿記会計、ワープロ、タイブなど従来のコースに加えて、有力企業とタイアップし、貿易実務や秘書実務、ビジネス英語などビジネスの広範な分野を網羅した講座を提供している。

附帯教育のコースは次のとおりである。

会計士受験科 公認会計士二次試験の受験歴のある人を対象に小人数に徹した上級科と、公認会計士二次試験の科目のうち苦手な科目を自由に選択して受講できる単科がある

また、数学など第一次試験受験のための講座も開講している
税理士受験科 単科には九月開講の十一月コース、一月開講の七月コース、四月開講の四月集中コースがあり、授業回数もレベルに合わせて週三回、二回、一回の三コースから選択できるように配慮している

簿記専攻科 日商簿記検定二級および一級合格を目指す人のためのコース

経理実務(所得税・法人税)コース 簿記の知識がある人を対象に実務に役立つ簿記・税法の知識を教授する

速成科 簿記の初歩から初めて日商簿記検定三級合格を目指す人が対象

フリータイム(CAI三級)コース 当校が独自に開発したコンピュ

ータによる簿記学習のためのソフトMCAIが使用される
日本語ワープロコース ビジネスに不可欠となった日本語ワープロの基礎から応用までを短期間にマスターする

コース制を徹底する女子商業高等学校

村田女子商業高等学校では、OA化に対応して昭和五十八年度にもカリキュラムを改訂し、総合実践を新しく設けていた。会社さながらの設備を使って実務を修得しようというもので、総合実践室にはオフコン、ワープロ、電話などを配置、会社設立から決算、さらに法人税の申告までを学習する。

さらに、昭和四十九年度から導入したコース制の特長を生かしながら、一方で進学者の増加に対応し、昭和六十二年度生からカリキュラムを大幅に改訂した。本校のカリキュラムは高等学校としてはもちろん完成されたものであるが、村田簿記学校と連動した五年間一貫教育も配慮している。

まず、一年次は全員が普通科目を合計二二単位履修し、幅広い基礎知識を養うとともに商業経済、簿記会計、計算事務の基礎を一〇単位履修する。二年次からは次の三コースに分かれる。

会計実務コース 経理事務に重点を置く。カリキュラムは村田簿記学校の税理士科とも連動している。普通科目は三五単位と三コース中もつとも少ないが、商業科目に三〇単位が当てられている
情報経理コース 一般的な商業実務、情報処理などを修得する。カリキュラムは村田簿記学校の経理情報処理科とも連動し、普通科目が三九単位、商業科目二六単位を履修する。情報処理に重点を置く



MCAI完成発表会、ホテルグランドパレスにて(昭和61年3月)

国際実務コース 進学等に備えて普通科目に重点を置き、五四単位履修する。商業科目は総合実践、情報処理など一単位を履修し、村田簿記学校の国際ビジネス科との一貫教育を目指している

文部省の研究指定校に

文部省は昭和六十三年度から「専修学校職業教育高度化開発研究委託事業」をスタートさせた。この事業はグループによる特定研究推進事業と、個別校による研究指定校事業からなり、研究成果を専修学校の教育内容の向上に役立てていくというものである。研究期間は三年間で、初年度は研究指定校推進事業については各分野から合計八〇校が、特定研究推進事業については工業、商業実務、服飾、美術・デザインの四グループ合計一八校が指定を受けた。

このうち商業実務分野では村田簿記学校、札幌経理専門学校、土浦情報経理専門学校、横浜簿記専門学校の四校（幹事校は村田簿記学校）がグループを結成、「商業教育における教材のデータベース化」をテーマに研究を行っている。具体的な目標は次の三点。

- (1) ①簿記会計②情報処理③秘書・事務処理等④経済・経営・金融等の四分野一五科目のテキスト、練習問題、指導マニュアル等を構造化すること

- (2) 学習結果をパソコンで分析すること

- (3) いつでも出力できるよう光ディスク上にデータベース化すること

なかでも情報処理の分野については、①本校と各協力校をパソコン通信で結ぶ②各校内でLANを利用する③各種アプリケーションソフトの利用方法を研究する④言語教育(COBOL・BASIC・CASL等)の方法を研究する⑤将来はこれらのテキストをシステム化(CAI化を含む)する——といった遠大な計画がされており、経理・ビジネス教育の未来を切り開くものとして注目を集めている。

MCAI

Murata Computer Assisted Instruction

簿記の知識は村田謙造が洞察したとおり、今やビジネスに関わる総ての人に必須となっている。経理の部署はもちろん、その他の部署においてもコスト意識が業績を左右するといわれるようになり、計数的なセンスが不可欠になってきたからである。ところが一般人にとって、就職前あるいは入社後において簿記を学ぶことは並み大抵ではない。教員には恵まれないし、優れたテキストは数えるほどしかないのが実情である。

この問題を解決したのがMCAI (Murata Computer Assisted Instruction)で、昭和六十一年の発表以来、各方面から照会が相次いでいる。

CAIはコンピュータの記憶・検索・計算などの諸機能を学習活動に活用しようというもので、語学や一般教科においては完成度の高いソフトが開発されている。ところが、簿記のソフトについては、テキストの字句を単に画面上に移した程度のものしか発売されていなかった。とくに専門教科に関しては、教授上のポイントをソフト開発者が取り込んでいくことが難しく、この乖離が最大のネックになっていた。

村田簿記学校では八十年にわたる簿記教育

の実績と、昭和五十五年以来の情報処理教育に関する研究成果を結集し、(株)久友情報技術の協力のもと、この画期的なソフトの開発に成功した。

現在は一般向けとして「簿記入門編」と「簿記三級編」が商品化され、村田簿記学校の新入生などに対する導入教育や企業の社員教育などに活用されている。

具体的には、「簿記入門編」は、仕訳から損益計算書・貸借対照表の作成までを、また「簿記三級編」は、「簿記入門編」終了後、あるいは基本的な複式簿記の仕組みを理解している人を対象に、預貯金・商品売買・有価証券・固定資産などの項目を、パソコンを用いて容易に理解を深め、納得のいくまで学習ができるように工夫されている。

「簿記三級編」は日本商工会議所などの各団体主催の簿記検定試験三級に照準を合わせている。

現在、村田簿記学校は、文部省の「専修学校職業教育高度化開発研究委託事業」の指定を受け、「商業教育における教材のデータベイス化」をテーマに研究を進めているが、MCAIの開発で培われたノウハウが大いに役立っていることはいうまでもない。